2022年（令和4年）
1月号（No. 920）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

国際的な山岳環境保護団体 HAT-J30年の活動を振り返る

神崎忠男

日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト（HAT-J）は、国際的に活動してきた山岳環境保護団体。1990年、日本山岳会はじめ主要山岳団体が創った組織で、ネパールを中心に山岳環境の保護・整備を推進するため啓蒙活動を続けてきたが、残念ながら昨年、活動に幕を引いた。その30年の軌跡をたどってみる。

設立に至る背景

1982年秋、国際山岳連盟（UIAA）は創立50周年を記念して、ヒマラヤの麓、ネパールのカトマンズで総会を開催した。ヒマラヤ登山における自然保護や環境保護の問題が提議され「カトマンズ宣言」を発布、登山隊に警鐘を鳴らした。この啓蒙活動の強化策として自然保護ポスターを世界の加盟国に配布した。それぞれの国は自国語でポスターを作成し、登山界および登山隊にヒマラヤにおける自然保護活動を啓発した。

さらに1989年、インドのニューデリーで山岳環境保護国際シンポジウムが、エドモンド・ヒラリー卿を会長とするヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト（HAT）が主管して開催された。それには山田二郎・日本山岳会会長、森田千里・日本勤労者山岳連盟会長、澤村幸蔵・日本山岳協会（当時）副会長が日本から出席した。

このときすでに、HATには世界の著名な登山家のひとりとして田部井淳子女史がトラスティの立場で籍を置いていた。この会議で、第2回山岳環境保護国際シンポジウムの日本での開催を要請された。当時、日本からのヒマラヤ登山隊が多かったこともその要因の一つだったと思うが、自然保護の重要性を認識するなかで組織設立の機運が盛り上がっていった。日本ヒマラヤ協会の協力をも得て、田部井女史を代表とする日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト（HAT-J）という山岳環境保護団体が、日本山岳会をはじめとする主要山岳団体から委員が派遣されて誕生したのである。

1990年に設立総会

1990年10月16日、東京・六本木の国際文化センターに主要山岳団体の関係者が集まって発足総会が開催され、約1500名の会員が入会登録をした。当然、日本山岳会の支援が活動の要となり、当時の日本山岳会理事会では、議題の一つに「HAT-J報告」という議題があった。

早速、「第2回山岳環境保護国際シンポジウム東京会議1991」の準備に入る。田部井代表の卒業した昭和女子大学の協力が得られたことが、成功へとつながった。

【組織と人事】

組織を立ち上げたからといって、すぐに会員が集まるわけでもない。主要山岳団体の会員で自然保護活

目　次

国際的な山岳環境保護団体
HAT-J30年の活動を振り返る … 1
大森、時枝両氏が秩父宮記念山岳賞を受賞 … 5
山野井泰史氏にピオレドール生涯功労賞 … 6
さんけん通信 … 7
追悼　宮下「御大」を偲んで … 8
追悼　北原秀介氏を悼む … 9
連載■ご当地アルプス登山案内
　1房州アルプス … 10
　2鎌倉アルプス … 11
東西南北 … 13
活動報告 … 15
　山行委員会／緑爽会
図書紹介 … 17
新入会員 … 17
会務報告 … 18
ルーム日誌 … 19
会員異動 … 19
INFORMATION … 19
編集後記 … 19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木 … 10～20時
水・金 … 13～20時
第2、第4土曜日 … 閉室
第1、第3、第5土曜日 … 10～18時

テク・チャンドラ・ポカレル
ラインホルト・メスナー
メスナー夫人
リチャード・プラム
クリス・ボニントン
ピエトロ・セガンティーニ
モーリス・エルゾーグ
モハン・コーリー
マッコーネル
カマール・ミルザ
エドモンド・ヒラリー
ヒラリー夫人

山岳環境保護国際シンポジウム東京会議1991の来賓登山家合同記念写真（昭和女子大学キャンパスにて）

動に専念し、愛好する会員を派遣する形でまず会員登録をした。

当時の日本山岳会理事会でも、誰がどのように携わって田部井さんを支えていくかが討議された。当時、私は海外委員会担当理事であり、日本山岳協会でも国際部に所属していたが、山田二郎会長は国際的な活動への期待が大きく、やや強引に海外委員の私がHAT－Jに派遣された。

【活動の始動】

日本山岳会はじめ主要山岳団体には、早くから自然保護委員会が存在していた。そこに突然、HAT－Jという山岳環境保護団体ができたことで、ハッとしたように清掃登山活動が一斉に始まり、日本の山はゴミのない美しい山になっていった。また、主要山岳団体のテコ入れで創られたことで、各団体および自然保護委員会の交流にも貢献できたと思う。

【国際貢献】

山岳環境保護国際シンポジウム

期日：1991年11月9日㈯・10日㈰

会場：昭和女子大学キャンパス

主催：日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト／共催：日本山岳会、日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本ヒマラヤ協会／後援：環境庁（当時）、文部省（当時）、日本放送協会／協力：財団法人イオングループ環境財団

公開講座「ヒマラヤの自然を汚染しないために」

〈ゲスト〉

エドモンド・ヒラリー（ニュージーランド）、モーリス・エルゾーグ（フランス）、ラインホルト・メスナー（イタリア）、クリス・ボニントン（イギリス）、エドワルド・ムスロフスキー（ソ連）、ピエトロ・セガンチーニ（スイス）、リチャード・C・プラム（アメリカ）、ロバート・マッコーネル（アメリカ）、カマール・アリ・ミルザ（パキスタン）、モハン・S・コリー（インド）、テク・チャンドラ・ポカレル（ネパール）、許競（中国）、ドミニック・シトリング（ブータン）、田部井淳子（日本）、坂下直枝（日本）

11月9日（1日目）

主催関係者挨拶、ヒラリー、エルゾーグ、ボニントン、メスナーの講演。夕方は皇太子殿下ご臨席の下、橋本龍太郎衆議院議員の乾杯でレセプションが開催された。

11月10日（2日目）

午前中は①高所登山、②トレッキング、③山岳観光のセクションに分かれて、各150名の出席者の下での分科会。最後に「東京アピール」を採択してシンポジウムを閉会した。この後、山岳地域の現地視察を兼ね北アルプス・立山、黒部を中心に富山会議が開かれ、全日程を終了した。

国際交流青少年自然環境体験登山

自然保護活動を持続的に未来へ継承していきたいという構想から、青少年の自然保護意識育成の必要性を感じ、アジアの高校生とアジアの山々をクリーンアップしながらの体験登山を計画、実施した。

1992年（第1回）、日本（富士山）での開催を皮切りに2008年（第15回）の日本（立山）開催まで、韓国や中国、ネパール、パキスタン、台湾、カザフスタン、インドなどを舞台に展開された。さらに2009年には、大人のための自然環境体験国際交流香港会議が、2010年にはユースアジア・YAMA・セッション（高尾山・富士山）も開かれた。その後、国際山岳連盟やアジア山岳連盟でも同様の活動が始まり、HAT-Jとしての活動を終止した。

設置当初のルクラの焼却炉（その後、建屋が建造された）

ルクラ村に焼却炉を設置

ヒマラヤ山地でのゴミの問題がHAT-Jで話題になり、ゴミに対する意識の高揚が重要かつ必須事項に挙げられた。それには、燃えるゴミ・燃えないゴミの分別が効果的と、エベレスト街道入り口のルクラ村に1993年、焼却炉を設置した。燃えるゴミは徹底して燃やすという作戦に住民にもゴミ対策の意識が高まり、村はきれいになった。

植樹活動でリンゴ園を開墾

焼却炉の設置と時期を同じくして、植樹ボランティア活動としての「リンゴ園開墾」が始まった。地元の環境団体SPCC（サガルマタ・ポリューション・コントロール・コミッティ）との打ち合わせやネパール政府からの土地の借用、地域住民への説明などで現地に行くことが多くなり、その際に焼却炉の点検、住民や専従人への指導を行ない、なんとか焼却炉の稼働も波に乗ってきた。

リンゴ園は、ルクラから北へ約1時間半歩いた、エベレスト街道沿いにあるチョプロン村の村外れにあり、0・3haほどの国有地を政府から借用した。土地は傾斜しており、土壌の質も悪く、リンゴ園にするにはかなりの整備作業が必要だった。貯水槽を造って水道を引き、段々畑として整地し、土壌の改良なども行ない、リンゴの樹を植えるまでには大分時間を要した。

資金的には「ニッセイ緑の財団」の助成が受けられ、苗木は青森県りんご協会からの寄贈、技術的には福島県のリンゴ関係者の指導と、植樹事業、海外ボランティア活動に大きな支援がいただけた。ときには地元の村人たちが自分の畑にリンゴの樹を植えたいと、苗木をもらいに来る。リンゴ園の土壌改良のための堆肥と2本の苗木を交換したが、なかには遠い村から1週間も歩いて来る人もいた。

なかなかリンゴの実がならないので、女性の専従作業員を福島県の安斉果樹園で1ヶ月の実習研修に呼び寄せたりもした。思うようにリンゴ園の開墾が進まないなか、長年、ダウラギリの麓で現地の人に農作業を指導している木村さんという新潟県出身の方が、自分の弟子のネパール人、シュレスタ氏をリンゴ園の管理人として派遣してくれた。彼の働きでかなり開墾が進み、リンゴ園らしくなり、植樹を始めて10年目ぐらいに実を付ける樹に育った。日本のリンゴのように肌がきれいではないが、食べてみると甘味もあって、おいしいリンゴが採れた。

小学校通学路の整備

HAT-Jが設置した焼却炉の横の道が、その上にあるルクラ小学校に続く通学路になっているが、路面が荒れていることに併せ、道端には動物のみならず人糞も少なくなく、悪臭が漂い不衛生で人通りも少ない。ニッセイに続いてリ

ンゴ園を支援してくれている「アルソアねむの木トラスト」の関係者からも「見捨てておくわけにはいかない」と通学路整備の検討を進め、環境衛生と安全性を考えて通学路改修整備工事が始まった。

路面は平たい石がきれいに敷き詰められ、汚物が片付けられ、見違えるような通学路が開通した。通学だけでなく、村民の生活路としても喜ばれて利用されるようになった。

1997年、尾瀬で開かれた国際青少年環境フォーラム

この通学路の整備が進むころから、地元の環境団体ＳＰＣＣとのコンタクトも密になり、ＳＰＣＣ自体の組織が充実し、活動も活発になった。さらに、ネパール山岳協会（ＮＭＡ）のサンタ・ビル・ラマ会長が、ＨＡＴ-Ｊの環境ボランティア支援事業は自分の国の問題という意識に立って、ＳＰＣＣとＮＭＡが協力して焼却炉やリンゴ園、通学路の管理態勢を整える方向で準備が進んだ。

そんななか２０１５年、ネパール大地震が発生、日本の登山界でも支援活動として災害募金が始まった。焼却炉および建屋、リンゴ園の作業所も地震による被害が届いたので、登山界に支援を要請、日本円で１８０万円の支援をいただくことになった。ネパール・カトマンズで開催されたマナスル初登頂60周年記念レセプションで現地に支援金を持参、日本の登山界からの支援セレモニーの一環として、ＨＡＴ-ＪからＳＰＣＣに支援金が渡された。

これを機に、ネパールにも独自の環境意識が芽生えてきた。その一つとして、ＨＡＴ-Ｊに共鳴して、ＨＡＴ-Ｎ（ネパール）が立ち上がったのである。

ＨＡＴ-Ｊ30年の実績

海外でのボランティア活動を中心に書かせていただいたが、当然、日本全国８つの支部による清掃登山をはじめとする自然保護活動を実施、国内でも山岳環境保護活動にそれなりの実績を残してきた。

また、松本市主催の世界岳都都市会議（２００１年）、国際山岳連盟総会（２００７年）には、サブイベントとして自然保護事業を実施した。これを機会に、各山岳団体との共催活動を利用して、ＨＡＴ-Ｊが中心となり、「山岳団体自然環境連絡会」が結成され、今でも活動が続けられていることは価値ある実績の一つと自負している。

結びに

２０２１年６月26日㈯、京王プラザホテルでＨＡＴ-Ｊ創立30周年記念式典・祝賀会が開催された。残念ながら、田部井淳子元代表の姿はなかったが、ご主人政伸さん、ご長男進也さんご来席の下、今日までＨＡＴ-Ｊを支え、ご尽力いただいた全ての方々への感謝を込め、またＨＡＴ-Ｊの功績を讃え、しめやかに開催された。

また、この記念式典・祝賀会の開始前にＨＡＴ-Ｊの総会が開かれ、ＨＡＴ-Ｊという組織の解散が採択された。すでに故田部井淳子元代表がご健在のときから、ＨＡＴ-Ｊは所期の目的を達成し、一時代における責任や使命は果たしたと認識していた。幕引きを考えているうちに突然、田部井元代表がご逝去され、このときも解散を検討したが、２０２０年の30周年までは、田部井元代表の遺志を継いで頑張ろうと活動を継続してきた。しかし、会員の減少や高齢化、財政の逼迫などから組織としての機能低下を認めざるを得ない状況になった。余力を残すなか、30年の実績や存在感を保持しながらの解散を決意した次第である。

＊

組織はなくなりましたが、その実績や自然保護精神、そして人は残ります。ＨＡＴ-Ｊ精神や実績を後世に伝承していくことが、残された会員たちの使命です。30年間支え、見守ってくださった方々に深く感謝申し上げ、心より御礼申し上げます。

（評議員）

AWARD

大森、時枝両氏が秩父宮記念山岳賞を受賞

昨年12月4日、年次晩餐会ウィークの一環として令和3年度（第23回）秩父宮記念山岳賞の授賞式と、受賞者による記念講演が行なわれましたので、その報告をさせていただきます。

今年度は年次晩餐会での発表が叶いませんでしたので、東京駅に近い日本外国特派員協会において、ウェブでも同時中継の形で授賞式と記念講演を行ないました。今年度は、立正大学文学部史学科教授である時枝務氏と、慶應義塾大学山岳部OBで日本山岳会会員でもある大森弘一郎氏の両氏が受賞されました。

受賞後、記念写真に収まる大森氏（前列中央）と時枝氏（その右）

時枝氏は、山岳宗教を考古学的視点から研究する分野に留まらず、東京国立博物館や文化庁、立正大学などで研鑽を積み、文献史料の存在しない時期の古代の人々が、山とどのように関わってきたのかというテーマを、全国50ヶ所以上の山岳宗教遺跡を実地調査し、採集した遺物から考古学的手法を駆使して明らかにしてきた実績が評価されました。

古代、人々にとって山々は崇拝すべき対象で、そこに立ち入るものではなかったのではないかという先入観は今や全く覆り、古代の人々も積極的に登っていた事実が少しずつ明らかになってきたことや、修験道の確立に至る起源から歴史までを幅広く研究されるなど、「山岳宗教の考古学」を樹立し、文献には残らない山中での人類の活動痕跡が考古学的な方法で検証できることを具体的に示した、と言えます。

大森弘一郎氏は、日本の主要山岳およびヒマラヤでの空中写真撮影による登山活動と、山岳科学分野への貢献が評価されました。高校から大学まで山岳部に所属して登山に専念された大森氏は、大学を卒業した後の1960年、ヒマルチュリ登山に参加した際に、インド測量局で見た空中写真を克明に筆写し、これを基に地理学者の協力を得て山頂部の地図化に初めて成功しました。

これを契機に、大森氏は小型飛行機の操縦免許を取得して、自ら操縦桿を握りながら日本アルプスの大部分を空撮し、これを基にして多くのガイドブックを出版し、登山ルートや地形などを今までにない精度で表現しました、さらにその後、ネパール・ヒマラヤ全域の空撮を敢行し、その成果をまとめた『Over the Himalaya』は、先のガイドブック出版やそれまでの成果と併せて、国内外における登山界の発展に大きく貢献したと言えます。また、大森氏は空撮による広範な観察を通して、未発見の氷河湖を発見したり、氷河湖決壊洪水の危険性を指摘し、温暖化による地球環境への問題提起をするなど、その活動範囲をさらに広げられています。

授賞式では古野淳会長から盾と副賞が手渡され、その後おひとりずつ約1時間の記念講演をしていただきました。現代でもそうですが、私たちにとって他者の気持ちを理解することは容易なことではありませんが、気持ちは立ち居振る舞いに現われることがあります。時枝氏の、文献史料のない過去への考古学的アプローチは、正に分からないことを目に見える形から推し量ろうとするものであり、大森氏の空撮写真とその地図化は、正に〝見る〟ことを突き詰めた行為であり、ともに見えることをひたすら見続けることによって、見えないものをつかみ取ろうとする行為だ、と言えるのではないでしょうか。

（山本宗彦＝副会長、秩父宮記念山岳賞担当理事）

AWARD

山野井泰史氏にピオレドール生涯功労賞

登山家・山野井泰史氏が史上13人目となる「ピオレドール生涯功労賞」を受賞し、昨年11月26日から28日まで、フランスのブリアンソン市で授賞式が開催された。山野井氏はアジア人初、最年少の生涯功労賞受賞となった。個人的なご縁があり、山野井氏、萩原浩司・本会常務理事とともに授賞式に参列する機会を得たので、その模様を一部報告したい。

「ピオレドール」とは、フランス語で「金のピッケル」を意味し、毎年、過去の受賞者を含むクライマーや山岳ジャーナリストがノミネートし、選考委員会が受賞者を決定する。2021年は、生涯功労賞の山野井氏のほか、ビッグウォールをソロで登り続けるスペインのシルヴィア・ヴィダルに特別賞が贈られた。併せてピエリック・フィヌとシモン・ウェルフリンガー（ともに仏）のサニ・パククシュ南壁（パキスタン）登攀、イーサン・バーマン（米）とユスジーン・ホーソン（英）のロブソン（カナダ）エンペラー（北西）壁の登攀が表彰されることとなった。

受賞者らと記念撮影に応じる山野井氏（左端）

山野井氏らは受賞者たちは、授賞式や記者会見の合間に、海外メディアの写真撮影やインタビューに応じて忙しい3日間となった。私もインタビューに同席して一部通訳を担ったが、彼らが事前に山野井氏の登攀歴をつぶさにリサーチしており、準備された質問は大変勉強になり、大きな刺激を受けた。山野井氏が「ピオレドールが、失敗に終わった登攀も評価してくれたのがうれしい」と授賞式後に国内メディアに話したように、登頂しなかった登攀にも多くの質問が向けられたのは興味深かった。

会期中には、「ピオレドールの未来」と題したパネル・ディスカッションの機会もあった。一般公開の形で30名程度の受賞者や関係者が、これからのピオレドールのあり方について話し合ったのだ。

同賞はこれまで「アルパイン・スタイル」の登攀を評価の対象としてきたが、それ以外のスタイルでも困難かつ革新的な登攀は対象とすべきではないか、一方、アルパイン・スタイルでも、例えばベースキャンプへのアプローチにヘリコプターを使った場合は評価対象になるのか、など真剣な議論が2時間にわたり続いた。そのほか賞を岩と雪に分けたらどうか、女性版を創ったらどうか、など幅広く議論された。

結論は出なかったが、ピオレドール関係者が自らの立ち位置を謙虚に自問して外部の意見にも耳を傾ける姿勢や、世代を超えて議論する様子は、文化の違いがあるとはいえ、日本の山岳関係者も大いに学ぶところがあると感じた、有意義な時間であった。

さて、人の登山を他人が評価や表彰をすることは、当然ながら議論の余地がある。実際、過去には受賞を辞退したクライマーもいる。授賞式翌日に、ニューヨーク・タイムズに掲載された「ピオレドールが、（間接的にリスクの高い登攀を助長することになり）名誉を求めるクライマーの死を早めることになるのでは」という内容のコラムは、現地関係者の間でも大きな話題となった。一方、受賞者のシモン・ウェルフリンガーが記者会見で「フランスのメディアは山岳事故ばかり取り上げる。ピオレドールは山岳関係者以外にも登山を知ってもらう良い機会だ」とコメントしたように、登山の社会的な意味を考えれば同賞の存在意義は大きい。事実、山野井氏が今回の受賞を機に海外でも広く知られるようになったことは、ひとりの日本人として純粋にうれしく思う。

出席する前は、ピオレドールはエリート・クライマーの特権的な賞なのかと身構えていたが、実際は親しみやすい雰囲気の中、受賞者の話を聞き、讃え、喜びを分かち合う場所であり、良い意味でイメージが覆された。

（和田薫＝国際委員会委員長）

さんけん通信

小学生向けのミニ水力発電見学会を実施

山研運営委員会　柴山信夫

昨年の10月15日㈮、地元安曇小学校の5・6年生向けに山研のミニ水力発電設備の見学会を実施した。同校では3年ほど前から中信地区環境教育ネットワークと連携し、上高地学習を基軸とした環境教育に取り組んでおり、1年生から6年生までそれぞれの学習テーマを設定、机上での学習に加えフィールド調査も実施している。

5年生と6年生でテーマは異なるものの、フィールド調査は合同となり、2021年度は①地質の学習（岳沢登山）、②歴史・産業の学習（明神、嘉門次小屋の見学）、③梓川のダム開発（見学）で上高地とその周辺を訪れている。8月初旬、上高地の案内を担当されている五千尺ホテルのネイチャーガイドより山研管理人の山田さんに、②の見学コースへのミニ水力発電組み込みの可否について相談いただいたのがきっかけである。

今年度はコロナ禍による移動自粛で、ミニ水力発電の稼働開始も大幅に遅れていたが、見学は可能な状態であるためJACとしても研究内容と成果を対外的に発信する良い機会と捉え快諾した。

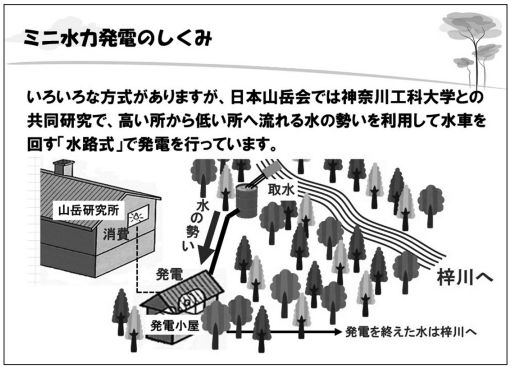
小学生を対象にミニ水力発電の仕組みと発電した電力の使い道を分かりやすく説明し、クリーンな電力を実感してもらうため、新たに説明資料を作成することとし、デモの実施についても検討を行なった。資料は見学者向けのリーフレットを基にパソコンで食堂の大型テレビに表示できるようプレゼン用ソフトで作成、専門用語は分かりやすい文言に置き換え、写真やイラストを多用し見やすいように工夫した。また、デモの内容については、ミニ水力発電の電力で山研の照明を点灯させるのが常套だが、小学生の皆さんには今ひとつインパクトに欠けるため、発電した電力で冷蔵庫の紙パックジュースを冷やし、説明を聞きながら試飲してもらうこととした。

当日は5・6年生の生徒合わせて8名、引率の先生と中信地区環境教育ネットワークのスタッフが2名ずつの計12名が来所した。嘉門次小屋の見学後、山研に移動、お昼前30分の時間枠で座学と発電小屋前での説明を予定していたが、前後のスケジュールの都合で短縮を余儀なくされ、急遽、説明ポイントを絞り込んで対応した。飛ばし飛ばしの説明だったが、簡単なクイズを織り込むなど興味を惹く工夫のお陰で皆さん熱心に耳を傾け、質問コーナーでは「水源の掃除（保守）にかかる時間はどれくらいですか」など質問も出た。

帰り際にテラスから発電小屋を見てもらい見学会は終了したが、特に興味を示した6年生の2名は再度の見学を希望、後日、引率の先生とともに山研を訪れることとなったため、管理人の山田さんに講師をお願いし、発電設備の説明を含め対応していただいた。

中信地区環境教育ネットワークでは、支援団体との連携で長野県中信地域の小・中学校向け環境教育支援事業を展開しており、自然体験系、観察・環境知識系、生活力向上系と、幅広い範囲の環境学習プログラムが用意され募集も行なっている。今回の見学を切り口として同ネットワークとの関係強化を図るべく、今後も要請があれば積極的に協力していきたい。

まずは食堂での座学で発電の仕組みを説明



小学生向けに分かりやすく解説した資料を用意

追悼
OBITUARY

宮下「御大」を偲んで

田邊 壽

宮下秀樹さんが亡くなった。急な話だった。宮下さんは仲間たちに「御大（おんたい）」と呼ばれていた。御大らしい「あっ」という間のお別れだった。

私は慶應の山岳部で御大の1年下で、山岳部に入ったときから「ナベ、ナベ」と可愛がってもらった。旧制の四中と二中ということもあった。御大も私も、山に登りたくて大学（というよりも山岳部）に6年在学した。

宮下秀樹（みやした・ひでき）
会員番号5550　名誉会員
1931年3月21日　東京生まれ
1950年4月　慶應義塾大学入学、同時に体育会山岳部入部
1953年3月　北ア全山積雪期初縦走
1959年　登高会（慶大山岳部OB会）ダウラギリⅡ峰遠征隊に参加
1960年　登高会ヒマルチュリ遠征隊に参加し、同峰初登頂
1963年5月　日本山岳会入会
1969年　日本山岳会エベレスト第2次南壁偵察隊隊長
1980年　日本山岳会チョモランマ登山隊副隊長で北壁隊を指揮
2007～2009年　日本山岳会会長に
2021年10月11日　90歳にて永眠

宮下御大が山岳部でやったことは、すごく早かった。

＊雪洞を実用化し、3月の剱岳～槍ヶ岳～奥穂～西穂～上高地を、私も入っていた4人の縦走隊で、オール雪洞利用による28日間で踏破した。〝雪の北アルプス全山縦走〟は、日本で初めての記録だ。

＊槍ヶ岳・北鎌尾根の千丈沢側稜を岩登りのトレーニング・ベースとして開拓し、テント6張から10張は張れるテント村として整備した。

＊アメリカの特殊部隊と穂高・涸沢で岩登り合宿をやり、技術交換をした。

＊チベットの6500～7500mの未踏の山群に若いメンバーを登らせて高所トレーニングを行ない、2005年、カルション峰（6674m）を登高会で登った。

＊一方、目標を明確化してきた日本山岳会と競い合いになったヒマルチュリ（7864m）には、加藤喜一郎さんと宮下さんが偵察隊となって西面に新ルートを見出し、慶應義塾創立100周年記念ヒマルチュリ遠征隊として、宮下さんも私もその頂上に立った。

宮下さんは、お父さんがセメント会社の重役だったので、慶應を出てすぐ東北のセメント会社の工場に就職した。お父さんの頭には将来、セメントの販売代理店をやろうという計画があったのかもしれない。しかし、宮下さんの胸の中には、すでにヒマラヤがあったものと思う。

マナスルの計画がどんどん進んでいくのを見、もう一歩でマナスルの隊員に洩れたとき、宮下さんは決心したのではないだろうか。

「俺はヒマラヤへ登る」―と東京に仕事を移し、慶應のヒマルチュリ偵察隊に加わり、新ルートを見出した。そして、1960（昭和35）年5月25日、その頂に立ったのである。

宮下さんはその後、私も参加した日本山岳会のエベレスト南壁偵察隊（1969年）の隊長を務め、1980年には、同じくチョモランマ登山隊の副隊長として、外国人としては初のチベット側からのエベレスト登頂を成功させる一方、北西壁パーティを指揮して、見事新ルートからの初登頂に導いている。

その後も宮下さんは山と離れることなく、慶應の仲間が登れるヒマラヤの山を探したり、日本山岳会では次々と出てくる新しい計画を、会長という立場から見ていたのだろうと思う。

私ももう一度くらい、いつものように「おいナベ、ヒマラヤへ行こう！」と声を掛けてくれる宮下御大に会いたい……。

北原秀介氏を悼む

根井康雄

群馬支部長を2期4年務められた北原秀介氏が2021年10月4日、病気のため帰らぬ人となった。本人の強い遺志でご家族と愛犬に見送られての最期だったという。享年71、法名は秀岳院釋光燿（しゅうがくいんしゃくこうよう）。

支部の誰からも慕われ、この5月に退任されたばかり。闘病中であることは支部の皆が知っていたが、まだまだ牽引役、兄貴分としてご活躍いただけると念じていただけに、支部員のショックは大きい。

10月4日といえば、支部恒例の秋の尾瀬合宿翌日のこと。私たちが山を楽しみ、山の話で酔いしれていたころ、北原さんはどんな思いで旅立とうとしていたのだろうか。支部の仲間が楽しんでいる様子を遠くから見てほっとされて、翌日旅立たれたのだろうか。そう思いたい。2年前のこの合宿で北原さんがフルートを演奏し、皆を魅了したことなども思い出される。

北原さんからは20年春以来、以前から経過観察していた肺の異変が癌であること、さらに肝臓にも悪性の癌が見付かったとの連絡で、深刻な事態であることが伝えられた。支部では黛副支部長に支部長職の代行をお願いし、北原さんには療養に専念していただける態勢をとったが、ご本人にとっては抗癌剤治療のつらい日々が続いたことと思う。それでも電話や直接会ってお話するときは明るく、いつも穏やかな声と表情だった。

昨年5、6月ころは比較的体調も良かったようで、5月にはフルートのコンサートに私ども夫婦でお招きいただき、久しぶりに北原夫妻とも談笑した。5月の総会はコロナ禍でのZoomによるリモート開催となったが、普段どおりの様子で議長を務められ、次の支部長は私が務めることとなった。

6月にお話したときには、7月の上高地山岳研究所に集まる夏の北アルプス合宿にも山研泊まりのみ参加するという予定だった。7月に入ったころだったろうか、独りで行くのは体調面で不安なので、と参加を見合わされた。その後、ときどきはお電話で体調をお聞きしていたのだが、だんだんと声もか弱くなってきた。

そんな折、登山装備を支部で使ってもらいたいので取りに来てほしい、との連絡でご自宅へ伺い、ザイルやピッケル、ヘルメット、ワカンなどを車に積みきれないほどお預かりしてきた。これらは、支部の装備として有効に使わせていただきたいと思っている。

訃報が届いたのは、ご逝去から1週間たった11日。和美夫人からのハガキで知った。「私の強い思いから、最後は家族と晩年いつも寄り添ってくれた愛犬に見送られて逝くことにいたしました。身勝手をどうかお許しください」と、本人の言葉が認（とた）められていた。ハガキを受け取った翌日、弔問に伺った。淡々と最後の時間を振り返るご夫人の静かな語り口と、主人を失った愛犬の遠くを探しているような眼が印象に残っている。

この追悼文を書くために、いくつかの著作や講演データを読み返してみた。最後に読んだパワーポイントの最終ページに、自筆でこう記されていた。「夢を目的に」。

北原さんの支部に託された夢を目的に替えて、一歩でも先へ、1mでも高くを目指します。安らかにお眠りください。

（群馬支部長）

北原秀介（きたはら・しゅうすけ）
会員番号8267
1950年 4月27日　北海道上砂川町に生まれる
1969年 日本大学文理学部地学科に入学。卒業後、鉄建建設入社
1977年 5月25日　日本山岳会入会
1977年 マッターホルン、モンテローザ、ブライトホルン登頂
1990年 アイガー登頂（東山稜）
1992年 ナムチャ・バルワ
1999年 アンナプルナ・ダウラギリ周辺単独トレッキング
2013年 日本山岳会群馬支部創立と同時に同支部に所属
2017～2021年　群馬支部長
2021年10月4日　病没、享年71

『山岳』第117年の原稿募集

本会の機関誌『山岳』第百十七年（2022年）の発刊は、本年7月中旬を予定しております。原稿の締め切りは4月中旬となりますが、会員の皆様方からのご投稿をお待ちしております。なお、採否につきましては、恐縮ですが編集委員会に一任させてください。

手書き原稿でも結構ですが、できますれば下記宛、メールでのご連絡、ご投稿をお願い申し上げます。

[送り先]〒145-0064大田区上池台1－35－5　神長幹雄
TEL 03－3720－7569　✉kaminaga@ruby.dti.ne.jp

（『山岳』編集委員会）

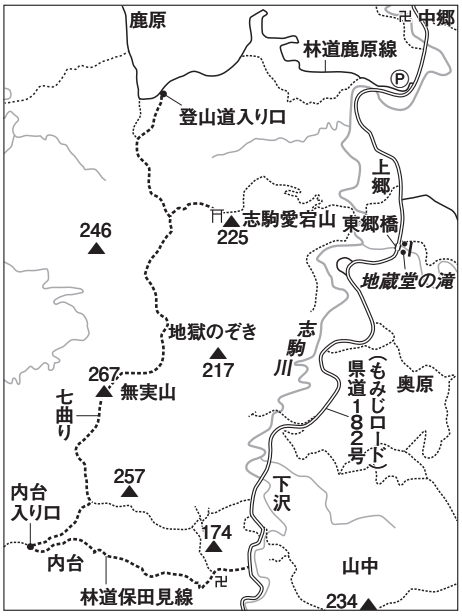
連載■ご当地アルプス登山案内1

房州アルプス

千葉支部　三田　博

鋸山から安房小湊まで房総半島を横断し、安房（あわ）と上総（かずさ）を分ける長大な尾根が房総郡界尾根だ。その支尾根である、富津市南部の内台集落から鹿原（しっぱら）へ向かう稜線が、いつのころからか「房州アルプス」と呼ばれるようになった。

最高地点は300mにも満たないが、東京湾越しに富士山が見える展望はすばらしい。年の暮れには、房総の遅い紅葉とスイセンの花が一緒に見ることができ、その時期がこのコースの一番の適期だろう。



【コースガイド】

志駒渓谷沿いの県道182号、通称「もみじロード」の途中に「志駒不動様の霊水」と呼ばれる水汲み場があり、車で大型のペットボトルに水を汲みに来る人が大勢いる。清潔なトイレもあるので、トイレはここで済ませておくのが良いだろう。そこから県道を南へ2kmほど進んだ鹿原林道入り口に4、5台停められる駐車スペースがあり、そこがスタート地点だ。

最初は単調な舗装林道歩きだが、標高を上げるに従い、木々の間から鹿原集落の先に富士山が顔を出す。30分ほど歩くと「房州アルプス登山口」という小さな看板がある。以前はもう少し先に進んだ所が登山口であったが、2019年の台風でそちらの登山道が崩落して通行止めになり、迂回路を通るようになった。

房州アルプスの道は、バブル期にゴルフ場建設のために稜線上に造られたそうで、所々道幅が広い部分もあるが、今では人がやっと通れるほどだ。地元の人を中心に登山道は整備されていたが、3年前の台風15号による倒木ですっかり荒れてしまっている。登山道入り口から20分ほど歩くと東からの道と合流する。合流点の脇の崖を登り、小高いピークに立つと狭い山頂には石祠が祀られている。近くの「愛宕神社」の奥の院のようだ。

さらに進むと、左に東側が切れ落ちた露岩のテラスが現われる。ここが「地獄のぞき」と呼ばれる好展望地だ。西には富士山も望め、日当たりも良く休憩するのには好都合。稜線上の道を進むと、右に登る踏み跡があり、トラロープがぶら下がっている。240mほどの小ピークだが、上がってみると梨沢大塚山（234m）や三浦三良山（281m）が望め、ここからも東京湾越しに富士山を見ることができる展望台となっている。

元の道に戻り先に進むと、右へと登る踏み跡がある。登った所が無実（みなし）山（267m）だ。見晴らしは残念ながら今ひとつだが、房州アルプスの最高地点で、山頂には二等三角点の標石がある。山名の由来は、源頼朝がここを通った際に椎の実が頭に当たったため「花は咲いても実は生るな」と怒り、それ以来実がならなくなった、という伝説があるそうだ。

山頂から急斜面を下り、「七曲り」と呼ばれるジグザグ道を降りて、崩壊してしまった道を、倒木をくぐりながらなんとかトラバースして行く。この辺りは特に台風被害がひどく、注意して歩いてほしい。そこを過ぎると穏やかなマテバシイの林になり、右上に上が

地獄のぞき南方の小ピークから正面に梨沢大塚山を望む

っていくとスイセン畑と夏ミカン畑がある。その脇を進むと舗装道路に出て、内台の集落の家の前を通り、房州アルプスは終了する。

保田見林道を東に降りていくと、「もみじロード」の山中集落に出ることができる。ここからは車道歩きになるが、志駒川沿いの紅葉を楽しみ、地蔵堂の滝など見物しながら1時間弱ほど歩くと、車を停めた場所に戻ることができる。

＊

このコースは、以前は高低差も少なく歩きやすいので子ども連れでも歩けるような場所であったが、19年に房総半島を襲った台風15号の被害がいまだに残り、登山道の一部が完全に崩壊し、倒木なども多数残っているため、子どもを連れて行くのはしばらく控えた方が良いだろう。台風の直後には、様子を見に来た地元山岳クラブの人の滑落死亡事故も起きている。赤テープなどあるものの、地形図・コンパスとGPSを用意して、山慣れた人の同行が必要だと思う。

房州アルプスの最高点で、二等三角点のある無実山山頂

【コースタイム】 駐車地（50分）登山道入り口（40分）地獄のぞき（30分）無実山（50分）房州アルプス出口（30分）もみじロード（55分）駐車地（合計4時間20分、11㎞）

【参考文献】 分県登山ガイド『千葉県の山』（山と溪谷社）

（千葉支部事務局長）

房総半島の山には、いまだに台風15号の傷痕が残っている

連載■ご当地アルプス登山案内2

鎌倉アルプス

神奈川支部　早川正志

鎌倉は、由比ヶ浜から鶴岡八幡宮を見上げると、馬蹄形（アーチ）のように山（尾根）に囲まれている。八幡宮の後背に連なるこの尾根が「鎌倉アルプス」と呼ばれ、「天園ハイキングコース」とも言われる人気コースとなっている。

今回は北鎌倉駅をスタートし、瑞泉寺までの尾根道を紹介する。道中や下山後、円覚寺や明月院、建長寺、瑞泉寺、鎌倉宮、荏柄天神、頼朝公墓所、鶴岡八幡宮など神社仏閣に立ち寄る楽しみもあるコースだ。なお、鎌倉アルプスは入山口や下山口、エスケープ・ルートが魚の骨のように数多くあるので、自分のお気に入りのコースや時期を見付けて楽しみたいもの。

【コースガイド】

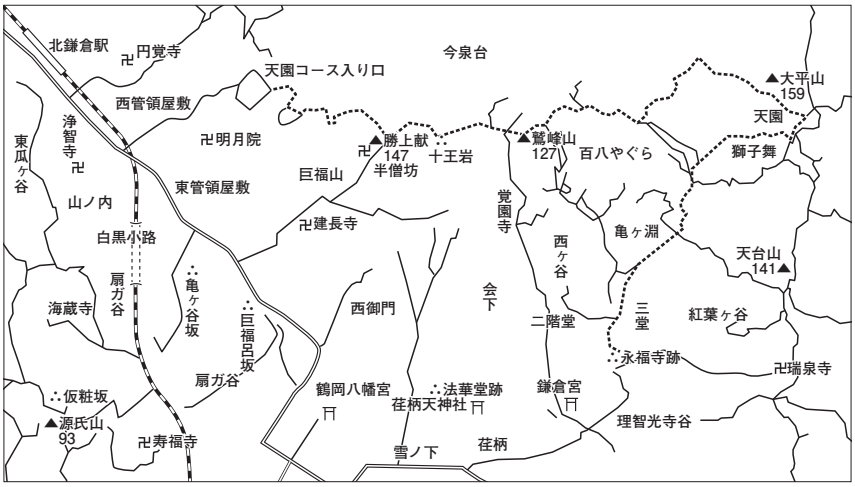
北鎌倉駅の下りホーム改札から線路に沿って円覚寺前のアスファルト道を進む。２００ｍほど進んで小さな橋を渡り、左折して明月院に向う。明月院から緩やかな登り道が始まり、「笛」という喫茶店の1ブロック先を右折。急坂を30ｍほど上がり、左に入る角を曲がると登山口に至る。

ここから急登の尾根道になり、林の中に立つ「古都保存法」の大きな掲示が目に入る。この空地から登り階段を進むと、鎌倉アルプスの概要が目に入ってくる。ここのピークから急な階段を一気に下ると、今泉台の登山口になる。この登山口から左下に崖を見ながら登山道を進む。住宅街の左奥には円覚寺の裏山、六国見山が見通せる。

建長寺・半僧坊から見た富士山。手前の森は台峰、鎌倉山・源氏山方面

崖脇の尾根を進むと右手の小ピークの奥に建長寺・半僧坊への柵の入り口がある。この柵から南に開けた方向に源氏山や由比ヶ浜を望むことができる。

アップダウンのある尾根道は雑木林の中で、展望は望めないが登山道は良く踏まれ、不明な枝道もない。さらに進むと林が開け、由比ヶ浜が一望できる。ここは十王岩と呼ばれ、以前は木製の展望台があった。眼下の林の先が鶴岡八幡宮で、段蔓（だんかずら）のある若宮大路が由比ヶ浜まで延びているのがよく分かる。ここから下りの尾根道を進むと、道標の立つ十字路がある。



メインルートはここを直進し、登りになる。鎌倉アルプスは露岩を歩くことが多く、周囲の崖には掘られた跡（岩窟）が見られる。鎌倉宮方面には「百八やぐら」という岩窟があり、やぐらの中には多宝塔が納められ、岩壁に仏像が彫られている。ここを構成する地質は砂岩とシルト層で、古（こしえ）より岩壁に簡単に工作できるのも、比較的軟らかい地質だからだ。

粘土質の急登を上がると、大平山の頂上（159m）露頭に着く。好展望地で、横浜ランドマークタワーや東京スカイツリー、房総半島が一望できる。ここから分岐が出てくる。公衆トイレを過ぎて上り坂を進み、コースマップのある広場の右に沿って下っていくと、大岩を経由して分岐点に達する。右は獅子岩経由鎌倉宮、左は金沢文庫・八景、直進は瑞泉寺経由鎌倉宮となる。この瑞泉寺コースは2019年の台風被害で倒木が多かったため、ここから先は通行禁止の看板が掲示されている。

今回は、獅子岩経由のルートを紹介する。滑りやすい涸れ沢の獅子舞の谷を下ると、苔むした獅子岩と銘板が目に入ってくる。道なりに進んで二階堂の住宅街に入り、登山道は終わる。川沿いに進むと広い永福（ようふく）寺跡を過ぎ、通玄橋で瑞泉寺からの道を合わせ、テニスクラブを過ぎると鎌倉宮に到着する。鎌倉宮からはバスで鎌倉駅へ。

なお、バリエーション・ルートとして瑞泉寺コースを紹介すると、通行禁止の看板を直進すると、アップダウンを繰り返しながら下りの登山道になる。倒木が見られる樹林帯を進むと、貝吹地蔵尊のやぐらが目に入る。この地蔵尊の手前、露岩の右側に天台山山頂があるが、林の中で道標もなくGPSで同定する必要がある。元のコースは意外にしっかりしていて、道なりに進めば右に下りる瑞泉寺への案内板がある。ここを右に下って瑞泉寺の脇に出て、左の山門を進めば二階堂の住宅街になり、通玄橋で獅子岩からの道に合流する。

十王岩から見下ろした由比ヶ浜と若宮大路（中央）

【コースタイム】 北鎌倉駅（10分）明月院（15分）今泉台登山口（10分）半僧坊（15分）十王岩（10分）今泉台分岐（20分）大平山（30分）獅子岩（25分）永福寺跡（20分）鎌倉宮（合計2時間30分、約6㎞）

【参考文献】 鎌倉市教育委員会：「私たちの鎌倉」「鎌倉の自然」「鎌倉を楽しむクイズ・ウォークラリー」鎌倉市　HP https://www.city.kamakura.kanagawa.jp

（神奈川支部副支部長）

N
西　北
東　南
S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

群馬のヤブ山③
赤沢山（1540m）

中山達也

・群馬県利根郡片品村戸倉
・2・5万図＝丸沼
・2016年10月中旬登山

赤沢山は日光白根山の西北西約9・2㎞（直線）にある。国道401号を尾瀬方面に向かい、尾瀬古仲橋を渡って600mほど先のX字路を右（東）に入る。国道分岐から700mほど走ると左に「採石事業協同組合」の看板があり、これに従い右（東）に折れ、車沢沿いの林道を行く。道はすぐダートになるが路面は悪くない。

採石場入り口から林道を約2・8㎞入った、車沢第二ダム付近の路肩に車を停めた（P）。路面は少し悪くなるが、さらに400mほど入った地形図の破線スタート付近の方が広く、止めやすい。

破線の道を探して入ってみたがヤブが深く、道型を見付けることができなかった（2006年の記録では、この破線の道を使って登っている方がいる）。さらに300mほど林道を先に進むと南に作業道が上がっていたので、これを登ってみることにした。路面は悪いがここまで車が入れるだろう。左（北）に駐車スペースもある。

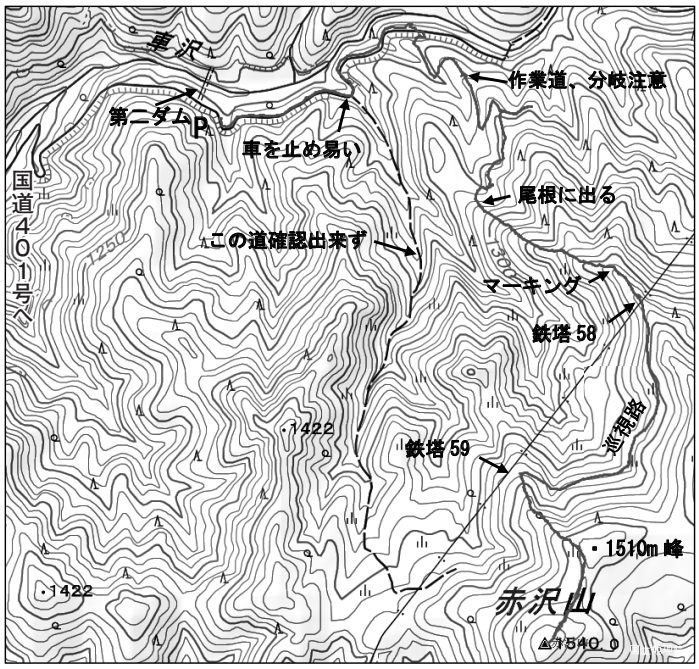
鉄塔58号から見た赤沢山

作業道は分岐が多く、結果のみ書く。最初は左、次は突き当たるが左に回り込む。次の三叉路は真ん中を行く。次は右の狭い道に入ると作業道の終点に出る。わずか右に降りて左に回り込むようにして尾根に乗る。

踏み跡はないが、膝から腰ほどのササヤブで問題はない。やがて尾根が広がり、3分岐する所に出る。どの尾根をたどっても降りられると思ったが、マーキングをした。急なやせ尾根を登ると、突然視界が開け高圧鉄塔58号の下に出て、左（東）からの巡視路に合流する。ここで赤沢山山頂が確認できた。

しばらく良く整備された鉄塔巡視路を行く。赤沢山の北1510m峰から北西に延びる尾根上の鉄塔59号の手前で左（南東）のササヤブ尾根に入る。1510m峰近くなるとササの背丈が高くなる。南西に向きを変え、鞍部に出て登ると山頂だった。ミズナラやブナで展望はない。手製の山名プレートが三等三角点の横に置いてあった。破線の道探しと林道分岐で時間を使い、登り約2時間30分。

地図は国土地理院地形図をカシミールで切り取って使用している



が、拡大・縮小してあり、縮尺は正しくない。登山軌跡はガーミンハンディGPSの軌跡。

〈注〉記述は登った当時のもので、現状は分からない。一部道がないので地図、コンパス（GPS）は必携。

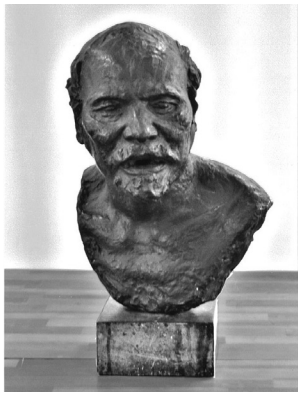
（群馬支部）

茨木猪之吉のブロンズ像
―穂高に消えた愛すべき山岳画家の面影を見る―

小原茂延

近代登山の黎明期、まだ写真というものがそれほど普及していなかった時代に、『山岳』や登山家の著書には画家による絵画が重きをなしていた。小杉未醒（放菴）、大下藤次郎、丸山晩霞、織田一麿などの描く絵画は『山岳』の表紙を飾った。次いで茨木猪之吉、中村清太郎、石崎光瑶らが表紙画を引き継いだのは『百年史』に詳しい。飄逸な似顔絵、水彩画、油彩も描いた茨木猪之吉は、横浜の小島烏水宅近くに住んでいて早くから交遊があり、当会の発起人らとも親交のあった画家である。

茨木猪之吉は、1888（明治21）年5月1日に静岡県富士郡岩松村（現在の富士市）岩本に生まれ、名を影山伊之吉といったが、幼くして神奈川県久良岐郡戸太村の茨木家に養子となっている。神奈川一中に入学するも、友人の勧めで京都の画塾、聖護院洋画研究所で浅井忠の門に入る。その後、都合で東京の小山正太郎の画塾である不同舎に入り、中村不折の指導を受けたという。1909年、小島烏水の誘いで赤石岳登山の一行に加わるが、体調を悪くして下山している。しかし、その後は山旅に情熱を傾けるようになっていった。丸山晩霞の紹介で小諸尋常高等小学校の図画教師となり、中村清太郎が訪ねて来たり、若山牧水とも小諸で会った縁で親交を結ぶようになり、牧水のスケッチなども残している。



1911年には文部省第5回美術展覧会に水彩画の「北国街道」が入選し、翌年には太平洋画会への出品作が宮内省の買上げとなる。1913（大正2）年になって小諸の図画教師を辞して上京、8月に上高地でウェストン夫妻、高村光太郎、窪田空穂ほかと同宿となっている。この間のエピソードなどは関塚貞亨会員が『山岳』や「会報」に詳しく、その場の雰囲気が彷彿と浮かんでくる叙述に興趣溢れる思いをしたのが印象に残る。

その後、山行に画作に励んだ茨木は、役員として会務にも大いに活躍し、なかんづく第2次大戦末期の金属供出の時期に交野武一会員らと上高地のウェストン碑レリーフを守った話はよく知られている。そして、終戦前年の1944年10月2日に穂高岳・涸沢小屋を出て白出沢を飛騨側に下る途中で忽然と消息を絶ってしまったのである。

年譜（小野幸氏が編み、千田啓一氏らの協力で池田町立美術館作成）によれば、茨木は1927年8月に大森にある佐藤朝山（のちに玄々）のアトリエで「畫家之像」のモデルとなっている。消息を絶った15年後の1959年11月5日に国際文化会館で「茨木猪之吉氏追悼会」が交野武一氏らの肝入りで開かれた折に、石井鶴三が「かの小杉放菴をして茨木以上によく似ているよ」と言わしめた朝山作の故人のブロンズ像をはじめ、遺作・画帖・手紙などが展示され、松方三郎氏の司会で、まず遺児の岳人・立夫・富士子・駒子4君の紹介があり、足立源一郎、高野鷹蔵、冠松次郎、大澤伊三郎氏らが思い出を語っているが、槇有恒氏が挨拶で「……そうした先輩の中でも茨木さんの残されたものはまことに大きい。茨木さんは徹底した放浪者であり、その行動は正に天衣無縫と言ってよく、途方もなくコダワリのない大きな風格の持主だったと思う。」と述べており、遺児や親族の方々も感激されたことと思われる。ブロンズ像は1940年9月に茨木が佐藤朝山を訪ね、飲み交わし歓談した際に、書生に自宅まで届けてもらった、と記載がある（前記年譜）。

1976年の三十三回忌を迎えた際には、命日とされる10月2日に故人の知り合いの方々と思い出会を横浜市の久保山墓地で法事を行なった後に「かるべ茶屋」で開き、

例のブロンズ像が飾られ、長男・岳人君の挨拶の後、吉沢一郎、交野武一氏らが思い出を語られた、と小野幸会員が会報で報告している。参会者は未亡人の姉・大野英子氏、長女・荻野富士子氏、次女・横山駒子氏ら近親者のほか、三田幸夫、野口末延、島田巽、望月達夫、川崎吉蔵、故人の弟子の吉村唯七画伯夫妻、徒歩渓流会・杉本光作などの諸氏、とある。

２００５年９月29日に緑爽会主催で「山岳画家・茨木猪之吉を語る会」がＪＡＣ集会室で開催され53名が出席し盛会だったと聞く。このときには猪之吉遺族として長男の岳人氏と次女の横山駒子氏が出席のほか、唯一の弟子であった吉村唯七氏遺族も駆け付けた由である。近藤信行会員がＪＡＣにおける茨木猪之吉を話し、茨木の研究家である犬塚幸士氏の講演で安曇野との関わり、小諸における牧水との出会い、その後のことなど甚だ興味あるものだったという。最後に甲府での滞在先であった大澤酒造の銘酒で自画像に向かって献杯をしている。このときはブロンズ像についての記載はない。

２０２１年秋になって偶然のことながら茨木猪之吉のブロンズ像を所蔵している美術館をネットで発見した。かなり以前の記録なので早速問合せてみたところ、現在も所蔵していることが確認できたのである。なんと、所蔵していたのは荻原守衛（碌山）を記念して建てられた信州安曇野の碌山美術館であった。

碌山美術館の武井敏学芸員と日程の調整を行なった後、晩秋の安曇野を訪ねた。木々の紅葉も鮮やかな碌山美術館の別棟でいよいよブロンズ像との対面が実現した。「やあ茨木猪之吉さん、安曇野におられましたか！」と思わず声を掛けてしまった。武井学芸員が示された資料の「碌山美術館報」第22号（２００２年）に彫刻家の基俊太郎が新収蔵作品について書いている。「このブロンズ像は昭和２（１９２７）年、時の院展に出品されたもので《畫家之像》のモデルは山岳画家、茨木猪之吉である。パリ帰りの佐藤朝山のアトリエ付近を散歩道としていた茨木が訪ねたのがこの制作の縁となった。欠けた前歯の口を開き、声を発するかに見える彫像であり、この《畫家之像》に茨木猪之吉が居る」と。基は東京美術学校で石井鶴三教授の感化を受けている。佐藤朝山は皇居前の「和気清麻呂像」や三越の「天女（マゴコロ）」制作で知られる彫刻家で、横山大観がその才能を認めて支援していたという。

なお、この「画家の像（畫家之像）」は常設展示はされておらず、今回も調査研究ということで許可をいただき、写真撮影などの便宜を図っていただいたことを付記する。

（緑爽会会員）

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

山行委員会――年次晩餐会記念山行「陣馬山に集まろう」を開催

例年の年次晩餐会の記念山行日程に合わせて、令和３年12月５日㈰に陣馬山（８５５ｍ）への集中登山が行なわれた。事前に参加申し込みは行なわず、自由参加でルートや時間は参加者が計画するフリープランで登山した。12時から14時の間のコアタイムに山頂に集合した。

主なルートは、①ＪＲ中央線・高尾駅北口からバス、陣馬高原下下車、徒歩１時間30分。②ＪＲ中央線・藤野駅からバス、和田下車、徒歩１時間30分。③ＪＲ中央線・高尾駅からバス、小仏下車、徒歩

陣馬山頂上での記念撮影

3時間30分。そのほか多くのコースがある。

参加者は、首都圏を中心とした方々で、50名程度。おおむね11時半には、多くの参加者が登頂した。天気は晴れで、奥秩父や丹沢の山々がよく見えた。

山頂でのイベントとして、総務委員会による山岳会グッズの販売、デジタルメディア委員会によるビデオ撮影が行なわれた。

記念撮影を行なって、帰路も各自のコースで下山した。

（征矢三樹）

緑爽会

緑爽会主催講演会の報告

「深田久弥没後50年　その人となりと魅力」と題した講演会を昨年12月4日㈯午後、武蔵境駅北口のスカイルーム1にて開催した。参加された皆さんは、深田久弥と親交のあった横山厚夫さんのお話と、深田久弥を平ヶ岳などに案内された桜井昭吉さんのお話と映像に惹き付けられた様子であった。また、会場には大聖寺の「深田久弥　山の文化館」の大幡事務局長や、深田研究第一人者の髙辻謙輔会員の姿もあった。

講演会当日の会場の様子

横山さんからは冒頭に、深田久弥と近藤信行氏と横山さんの誕生日が3月11日で一緒であると知ったのは、茅ヶ岳で急逝された日であったことが語られた。その後、深田久弥との文通のきっかけが『岳人』連載の「机上ヒマラヤ小話」だったこと、また、深田一家が東京に引っ越してこられてから訪問したときの深田さんの様子などが語られた。たくさんの関係書籍を持参いただき、深田久弥が思わぬ書物に出ていることを、その書籍とともに紹介された。知られていない深田久弥の一面を知る貴重なお話であった。また、志げ子夫人のことも含めて、楽しいエピソードをお話いただいた。

桜井さんは、深田久弥を平ヶ岳に案内されたときのことを、パワーポイントを使い、多くのシャープで貴重な写真を映しながら説明していただいた。越後駒ヶ岳を案内のときは、越後駒ヶ岳のみと思っていたところ、先輩から三山縦走だと言われ、月曜を休まざるを得なくなったこと、また、未丈ヶ岳スキー登山のときは、ヒマラヤにも行くような方々なのに誰も先頭に立ってくれず、一人でラッセルされたことなど語っていただいた。

大聖寺の江沼神社にある深田久弥文学碑には「山の茜を顧みて～（山恋の詩）」が刻まれているが、その基になったのは、未丈ヶ岳登山前日に深田さんの講演会を開いた折に、色紙がないからとさらしに書いていただき、それを桜井さんが写真に撮っていたものである、との話であった。

昨年は深田久弥没後50年の特別な一年となった。『山岳』第116年にも雁部貞夫氏が深田久弥のことを書かれている。そんななかで、深田久弥を知るおふたりにお話を伺い、写真や著作も目にして、改めて深田久弥の人となりを知り、思いを馳せることができ、意義ある講演会となった。

（荒井正人）

会員証の継続発行をご希望の方へ

有効期限が2022年3月31日の会員証をお持ちの正会員の方で2022年4月1日から有効の会員証をご希望の方は、2022年2月26日（土）までに下記専用口座にお振込みください。
振込手数料はご負担願います。ご不明な点は事務局までお問合せください。

① ゆうちょ銀行から振込む場合
　口座記号・番号　00150　1　696644
　加入者名　日本山岳会会員証発行申請

② 他銀行から振込む場合
　金融機関コード　9900
　店番　019　店名　〇一九（ゼロイチキュウ）
　預金種目　当座　口座番号　0696644

金　額　￥1,000

通信欄必須事項　会員番号、氏名、おところ、「継続」と明記願います。
年会費未納の方は先に年会費をお納め願います。

図書紹介

俳句で巡る日本の樹木50選

広渡敬雄著

2021年8月
本阿弥書店
四六判　112ページ
2200円＋税

著者は２０１２年に、権威ある第58回角川俳句賞を受賞されており、翌年『山岳』第１０８年に「俳句と登山」と題して寄稿されている。本書は、俳句雑誌『俳壇』に「日本の樹木十二選」として連載を始め、結果的に４年間連載したものに２篇を加えて上梓されたものである。

山好きはブナなど山の木を思い浮かべるが、ここで取り上げられている樹木には、自然林もあれば街路樹や防風屋敷林といった人工林も含まれている。

本書の構成は、それぞれの樹木について、まず植物学的な簡潔な説明があり、その樹木を詠んだ俳句が数句挙げられる。それこそ芭蕉から現代作家まで。どれだけの句から選んだことだろうと思う。それらの句に対する著者の解説があって、いわば歳時記といえる部分である。

続いて、北は北海道から南は沖縄まで、トドマツからハイビスカスまでと言ったらよいだろうか、この木ならここが代表的だと、著者自らが訪れた地域に関する歴史などが紹介されている。それは読む者に行きたくなる気持ちを起こさせる、さながら旅行・吟行案内である（訪問地を示した日本地図を後掲）。最後に広くその地域を詠い込んだ数句が紹介され、それについて著者の解説で締めくくる、との流れである。著者の感性と知見で選ばれた句は、添えられた写真によりいっそう情景が浮かんでこよう。改めて俳句の良さを感じ

るとともに、俳人に関する知識までもが得られる。

樹木といえば、果実や漆・木工製品など、古来よりその恩恵や恵みを受けてきた。加えて、山を保水し酸素を生み出しているのは森であり、樹木と人間の営みとは切っても切れない関係にある。そして新緑、紅葉など、四季折々の日本の風景を織りなす大きな要素でもある。だからこそ多くの詩歌に詠まれてきた

取り上げられた樹木の多くは、おそらく誰もが日常的に目にしているものである。外来種も含めて、いかに我が国は多種多様な樹木に溢れていることかと気付かされる。しかし、普段の生活の中で、樹木から受ける恩恵に思いを馳せることは少ないのではないか。本書は俳句に詠まれた樹木を紹介しているものであるが、著者はあとがきにこう書いている。「最近の俳句では、樹木も含めた自然が詠まれることが少なくなった。我々は少しでも自然に目を向け、その一員であることを自覚し、その素晴らしさとともに恐ろしさも知るべきだとも思う。」ここには樹木に限らず、自然の果たしている役割、恩恵や恵みに感謝し、畏敬の念を持って対峙したいとの思いが底辺にあるように感じられる。机辺に置いて、ちょっとした時間に1木ずつ読むなど、しかも何度でも読み返せる一冊である。（荒井正人）

会務報告

令和3年度第8回(12月度)理事会議事録

日時　令和3年12月15日㈬　19時00分～

場所　集会室およびオンライン（Zoom）

【出席者】古野会長、坂井、山本・橋本各副会長、柏、南久松、萩原各常務理事、松原・松田・清水・飯田・久保田・平川・川瀬・長島各理事、黒川・佐野各監事

【欠席者】なし

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・会報「山」への広告掲載許可について検討し、承認された。「山の絵をつなぐサイト」の広告出広。（萩原）（賛成15名、反対0名）

【協議事項】

1・1月実施予定の支部連絡会について、取り上げる内容と分担を協議した。（柏）

【報告事項】

1・寄附金2件の受入報告があった。（南久松）

2・正会員15名、準会員1名の入会を承認した旨、報告があった。（古野）

3・晩餐会ウィークの結果について報告があった。（柏、長島）

4・理事登記が完了したという報告があった。（柏）

5・令和4年度予算および事業計画の提出を委員会、支部に依頼する旨、説明があった。（柏）

6・登山計画書の提出状況について報告があった。（川瀬）

7・山岳研究所の国有林使用許可申請に関わる更新手続きについて報告があった。（川瀬）

8・全国博物館等連絡会議（参加9館）が11月27日に開催されたという報告があった。（清水）

9・令和3年度後期海外登山助成金申請について説明があった。（坂井）

10・ルーム水漏れ対応工事の進捗状況について報告があった。（柏）

11・102号室の燻蒸（カビ対策）の進捗について報告があった。（清水）

12・HPの不具合に関し報告があった。原因は特定できていないが、会員も各自のPCに確実にウイルスソフトを入れることが大切である、との説明があった。解決するまでDM委員会への緊急でない作業依頼は避けるように。（柏、清水）

13・北アルプス展望美術館からの名義後援の依頼について了解した。（柏）

14・国土地理院と地形図の登山道情報の提供について打合せをした

という報告があった。（長島）

15・「山」12月号の発行について報告があった。（節田）

ルーム日誌 12月

2日　山岳地理クラブ　三水会
9日　YOUTH　CLUB
10日　図書委員会
13日　スケッチクラブ
14日　フォトクラブ
15日　理事会　休山会　つくも会
16日　山遊会
20日　会報編集委員会
22日　家族登山普及委員会　山岳古道調査PT　フォトクラブ　麗山会
23日　緑爽会　平日クラブ
24日　三水会

12月来室者　141名

会員異動

物故

保坂隆司（4663）21・12・4
笹川和男（5052）21・9・23
山本　祝（5316）21・10・23
小澤武麿（5665）21・12・19
中島　忠（6457）21・12・5
小野　晃（9510）21・12・4

退会

河村　勝（5802）　越後
松坂良一（6074）　越後
坂井博一（12261）
竹永哲夫（14939）　福島
萬屋　穣（15518）　埼玉
馬場久子（A0164）　東京多摩

INFORMATION インフォメーション

◆第31回「山好きの山の絵展」開催

アルパインスケッチクラブ

この絵展は毎年2月に開催しており、昨年度はコロナ禍のため初めて中止しましたが、今年度は第31回として再開します。60人の会員が実際に登り、見た山々を描いた作品＝水彩画、油彩画、版画など約70作品と、スケッチブック10点近くを展示します。

毎年、山好きの方々ほか、多くの方にご来場いただきご好評いただいております。皆様のご来場をお待ち申し上げます。

会期　2月20日(日)～26日(土)　10～18時（初日は11時45分から／最終日は17時まで）
会場　JR有楽町駅前　東京交通会館2Fギャラリー　千代田区有楽町2―10―1
TEL 03-3215-7962
入場無料

＊今年は「世界の山々展」を会員有志10名で同会館B1Fエメラルドルームにて同時開催します。

訂正

会報12月号14ページ、「富士山南麓ブナの巨木と溶岩洞窟・溶岩樹形の観察」の記事中、「富士山全体の溶岩流の年代測定によって作成された地質図」とあるのを「現地踏査と噴出物の解析によって作成された富士山全体の地質図」、と訂正させていただきます。

（科学委員会・平野裕也）

❖編集後記❖

●今号6ページで和田会員がレポートしてくれているように、山野井泰史さんが「ピオレドール生涯功労賞」を受賞されました。ヨセミテやバフィン島、南米、ヒマラヤなど、世界各地における赫々たる登攀の実績が評価されたものですが、日本の登山界にとっても大変喜ばしいことだと思います。

●その山野井さんを主人公に、なんと成人コミック誌『ビッグコミック』で「アルパインクライマー」という新連載が1月10日号から始まりました。どんな展開になっていくのか、同誌を創刊号から読み続けている私としても大いに期待しているところです。それにしても、同誌には毎号、「ゴルゴ13」も連載されているので、なんとも不思議な気分ですね。（節田重節）

日本山岳会会報　山　920号

2022年（令和4年）1月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261-4433
FAX　東京(03)3261-4441
発行者　日本山岳会会長　古野　淳
編集人　節田重節
E-メール：jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社